じまんのうらやま

麦わらぼうし

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある夫婦と娘が所持している山があった。その山は自然が豊かであり、少女にとっては庭のような遊び場だった。

そんなある日、バードウォッチングをするために山の中にある広場に食べ物を持っていくと、そこに見慣れない生き物が現れる。なんとそれは――――ピカチュウだった。

目次

1 ―― 1
2 ―― 7
3 ―― 12
おまけ ―― 19
後日談 ―― 25

1

森の中を、私は歩いている。

いや、正確には山の中なのだが……とにかく私は、青い木々が生い茂った道無き道を歩いていた。この山は私が生まれてからずっと遊び場として過ごしてきた所であり、私にとっては庭のようなものだ。

クマのような危険な動物は居ない。小鳥や小動物、小さな昆虫たちが住む私たちの楽園である。私と両親以外に人間が入ってきたことは無く、木の実やキノコなどの森の恵みをその場で取って食べたり、持って帰って両親を驚かせたこともある。

そして、この森の中でも私しか知らない秘密の場所。そこに私は向っていた。

草をかき分け、時に木と木を飛び移って山の奥深くへと進んでいくと、開けた空間に私は辿り着いた。

「≪とーちゃーく!≫」

私は笑顔で声を出すと、その声が木霊になって山に響いて――――いかなかった。何故か私の声が違う音で響き渡る。きっとこれは山彦をする奴らが仕事をサボっているのだ、そんな存在など私は知らないが、きっとそうに違いない。

それはともかくとして、私が視線を前に向ければ広場には木箱や筒状の金網などが置かれているのが視界に映る。

そう、ここはエサ場である。目の前にあるのは、バードウォッチングなどで餌を置いておくことなどをするための台座だ。

森の動物たちは警戒心が強い所為か、私が近づこうとすると逃げてしまうのだ。別に取って食う訳でもない、むしろ私は触れ合いたい、仲良くなりたいのだ。

故にここで餌をやりながら、間接的にでも動物たちと触れ合い、あわよくば毛並みを触らせてもらい、一緒に遊ぶという素晴らしい作戦なのである。

と言う訳で、私は森の中で見つけた木の実などを台座や金網に入れる。本当は粟(あわ)や脂身なども用意したいのだが、子供の私ではコレが限界だ。

そして、私は広場の隅にある茂みに隠れて森の動物たちが来るのを待つ。すると、すぐに数匹の鳥が木の実を置いた台座や金網に降りて来た。もう少し待てば、リスなどの小動物も来るかもしれない。

そして木の実を食べる鳥を見ながら数分、茂みから小さなガサゴソと音が聞こえて来た。私は息を潜めて小動物を待つ。

果たして今日は、どのような動物が来るだろうか？　私は、この森に住んでいる動物を思い浮かべる。リス、イタチ、キツネ、シカ、他にも何匹か居るが、今までこの場所

に食べにきたのはコレぐらいである。
そんなことを考えている間に、今日の動物は茂みから姿を現した。
「ぴか～？」
……。
――――いや、まて。
待て待て待て待て待てまてまてまてまてマテマテマテッ!?
――――ふう。
よし！　一旦落ち着け。
私の名前は？
津雪（つゆき）　美々（みみ）。とっても可愛い女の子。特技は森の中を縦横無尽に移動できること。
大好きなのは、皆で一緒に遊ぶこと。
じゃあ目の前に居るあの生き物は？
雷のようなギザギザの尻尾、丸くて赤い頬（ほほ）、頭から伸びる黄色と黒の細長い耳。
知らない人なんて、まず居ないだろう。世界的に有名な人気者。子供から大人まで広く愛されている憎（にく）きあんちくしょう。
そう、それは――――
「チュウ～」

その汚れていても愛らしさ失わずに後ろ足で立って、前脚で木の実を食べるその姿はまさしく――ピカチュウだった。

「……」

いや、なんで？

なんでピカチュウが居るの!?

私はこの森の動物なら全部把握している筈、その中にピカチュウなんて居なかった！

いや、そうじゃない！　そもそもピカチュウが居る筈が無い！　空間を操るポケモンが此処にピカチュウを送ったとでもいうのか!?　あながち本当に存在したら有り得なくないのが、なんか嫌だ。

というか、居ない筈の存在が突然に現れるとか何処の裏庭だ！　いや、ここは山だから裏山か？　どうでもいいわっ！

「チュゥ……」

あれ？　なんか、あのピカチュウ弱ってない？

よく見ると身体が汚れているだけじゃなくて怪我もしているような……。

「ちゃぁ……」

なんか突然、倒れちゃったんですけどっ!?

どうすんの？　いや本当にどうすればいいの!?　何も見なかったと現実逃避して家

に帰ればいいの？

できるか！　だってピカチュウだよ!?　弱っているピカチュウを放って置くなんて世界中の人間から怒りを買っても不思議じゃないよ？

と言う訳で私はピカチュウの傍に近づいた。

うん、間違いなくピカチュウだ。さて、近づいたのは良いもののどうしたものか……。

いや、だってピカチュウだよ!?　本物を前にして緊張しない訳がないじゃないか！

と、取り敢えず手を伸ばして頭に触れてみる。すると、ピカチュウは目を開けてこっちを見てきた。

う、うわぁ～！　こっち見た～！　どうしよう!?

そんなことを考えていると、ピカチュウは私の手をペロペロと舐めて来た。

「ちゃあ～」

あ、あれ？　意外と元気？

取り敢えず私は、予備で取って置いた木の実をピカチュウに手渡ししてみる。するとピカチュウはスンスンと匂いを嗅ぐと木の実を受け取ってモグモグと食べ始めた。

取り敢えず、大事が無さそうなので私は気持ちを落ち着けようと空を見上げた。

「ショオォーーッ!!」

――――おい待て、なんか虹色に輝く巨大な鳥が飛んで行ったぞ。現実逃避しようとし

たのにどうしてくれる。

この山、一体どうなっちゃったんだよ！

2

非現実的。いや、有り得ないと思って出来事が実際に目の前で証明された時、人はどのような行動を取るのか？

私の場合は現実逃避という行動をした。だが、それは空を飛ぶ虹色のアレの所為で強制的に引き戻された。なぁに、あれ？

とは言え、何時までも現実逃避という行動はできない。意識を戻されたのならば、現状を見定めて現実を受け入れるべきである。と言う訳で、私は視線を前に戻す。

「ピッ？」

首を傾げて、私に向けられる目は、およそ邪気というものが介在しない子供のような瞳だった。

うん。どこからどう見てもピカチュウである。

「ピッカチュー！」

ピカチュウは私に向かって手を上げて声を上げる。挨拶をしてくれたのだろうか？

だとしたら嬉しいのだが、絶賛混乱中の私には同じように手を上げることしかできないよ？

「ピカ、ピカチュ！」

私の挙手を返事と受け取ったのか、ピカチュウは私の方を見ながら別の方向に指を向ける。それが示す先には、木の実が無くなって空になった木箱があった。

なんだ？　もっと木の実を寄越せってことか？　何という食いしん坊だ、デブチュウと呼んでやろうか？

取り敢えず私は一度頷くと、ピカチュウを置いて広場を後にした。

◇

新しい木の実を取りに森の中を駆ける。私は今、少しでも先程の光景を考えないようにしたかった。現実感がない、有り得ない、なんでピカチュウが居るんだ？　きっと虹色の鳥の所為だ、アレの所為で私の頭が整理する時間を奪われた。つまりにピカチュウが現れたことは問題視するようなことではない。

そんな訳あるかぁぁぁあああああああああああああ!!!?

ここ、現実だよね!?　実は夢の中とかじゃないよね!?　私が突然、別の場所に来てしまったとか有り得ないよね!?

私は森の中を駆け回りながら周囲に目を向ける。

知っている光景だ、私がいつも遊んでいる森の中だ。リスがいる。イタチがいる。キツネがいる。シカがいる。それは、いつも通りの光景であり、この山は私の知っている

山だという証拠である。

いや、だったらなんでピカチュウがいるんだよぉおおおおおお!!!?

いけない、思考がループしている。こういう時は別のことを考えるべきだ。もう一度、ちゃんと現実逃避して情報を整理するんだ。取り敢えず、木の実を取りに行こう。

そんなことを考えていたのだが、私は既に新しい木の実を腕に抱えていた。もはや頭と身体が別々になって行動しているようだ。

これは一度冷静にならなければならない、頭を冷やすべきだ。

――ドッボーン！

ふう、夏だけど川の水は冷たいぜ！　……いや、ちょっと待て私の身体！　頭冷やすってそういう意味じゃないから！　物理的に冷やすんじゃなくて、思考を落ち着けるってことだから！

あぁ、でもこうしていると昔も川で遊んでいたことを思い出すなぁ～。

――グニュ

そんなことを考えていると、川の底で何か柔らかいモノを私は踏んだ。なんだろうと思って手で掴んで川から出してみると、それは子供用の小さな靴だった。

そう言えば、昔遊んでいるときに溺れかけて持ち物を何個か失くしちゃったことがあったっけ？　その時は助けてもらったから、大慌てになっていたような記憶がある。

あんまり覚えていないけど。

今の私だと、流石に履けないね。かと言って不法投棄とかする訳にはいかないのでしっかりと持ち帰ろう。それに身に着けていた物を捨てるとか、ゴーストタイプが憑りつきそうで怖い。もしかしたら残留思念とか感じ取って私に何か起きるかも、私は生きているけど生霊とか解釈されたら有り得なくは無い。

とりあえず私は、冷やした木の実と靴を持って広場に戻ることにした。あれ？　そんな理由で川に来たんだっけ？

◇

「ちゃ～」

広場に戻ると、やはりそこにはピカチュウが居た。いよいよ本格的に現実を受けいれなければならない。

そんな私の葛藤など知らないとばかりに、目の前のピカチュウは私が持ってきた木の実を美味しそうに食べている。

「レビィー」

更にその隣では、２本の触覚のようなものが付いて透明な羽のついている全体的に緑色の妖精が木の実を頬張っていた。

……なんか増えた!?

「レビィ！　レビィレビィ！」

お前もか！　お前も木の実を寄越せってか!?　良いよ良いよ、沢山取って来たから好きなだけ上げるよ、だから服を引っ張るな、はだけちゃうだろ！

そうして私は二匹の食いしん坊に全ての木の実を差し出した。ピカチュウは満足したようでその場で丸まって眠ってしまった。自由過ぎるだろ!?

それで妖精の方は――――

「レビィィィィィィィィ!!!!」

なんかメッチャ光り輝き始めた。その光は、まるで周りの木々に脈動するかのように伝わり、一際は強く発光する。その光量は余りにも強く、私は思わず目を閉じた。

いや、ちょっ、これぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?

そうして私は、光の中に飲み込まれた。

3

妖精の発光がようやく収まったらしく、私はゆっくりと目を開ける。するとそこは――

「……」

いつもの広場の風景だった。だが、少し変だ。具体的に何が変かと言われると、言葉にしにくいのだが、何か違和感がある。だが、それよりも大きな変化があった所為で私は違和感を放置してしまった。

つい先ほどまで寝ていたピカチュウと妖精が居なくなっていたのだ。

もしかしたら、全て夢だったのだろうか？

明晰夢、もしくは白昼夢でも見ていたのかもしれない。そう言えば、先ほどから自分は理解不明な行動を取っていた気がする。疲れているのだろうか？

今日は一度、家に帰った方が良いかもしれない。そう考えた私は、広場を後にして帰路に就き始めた。

◇

私は森の中を進んでいる。それは帰り道であり、見慣れた場所の筈だった。だが、や

はり何故か違和感がある。一体何が私に、そう感じさせるのか？　だが、私はそれを放置する。夢か現実か分からないが、今の私は精神的にとても疲れていた。一刻も早く家に帰って、泥のように眠りたい。

だが、その前に一つだけ確認して置きたいことがあるため、私はある場所に向かっていた。

それは川である。広場で目を開けた時、持ってきていた筈の靴が無くなっていたのだ。

来る途中で落としたのか、本当にタダの夢で最初から靴を持っていなかったのか分からないが、不法投棄する訳にはいかないので確認ついでに川に向かっている。今のところ、落ちている靴は見当たらない。

「あはは！」

そんなとき、川の方から声が聞こえた。女の子の声だ。

私は声がする方に向かうと、一人の女の子が川遊びをしていた。それを目にした私は、愕然とする。何故ならそこには、今よりも幼い頃の私が居たのだ。

過去に戻ったとでもいうのか？　そう考えるよりも早く、私は昔の私に見つからないように草の陰に隠れた。どうしてそうしたのか分からないが、なんとなく会ってはいけないと思ったのだ。

――――ドッボーン！

その次の瞬間、物凄く聞き覚えのある音を聞いた。視線を向けてみるとそこには、川で足を取られて流されている私が居た。

あぁ、そうだ。私は昔、一度ここで溺れて誰かに助けられたんだった。だとすると、この後誰かが助けてくれる筈である。

そして女の子が流されていく、助けを求める声を上げ、そのまま川の中に沈んで行き……ん？

ちょっと待って!?　私を助けてくれた誰かさんは何処!?　そう思って辺りを見渡すが、女の子以外の人間は見当たらない。

まっ、間に合えぇぇえええええええええええええ!!!!!

私は茂みから飛び出すと、無我夢中で川の中に飛び込んだ。

◇

私は川から上がると、助けた女の子を横に寝かせる。触診してみると、どうやら気絶しているだけのようだ。

「ん、んぅ？」

私が触ったからか目を覚ましたらしく、顔を覗き込んでいた私と一瞬、目が合う。それを理解した私はすぐにその場を去った。背後から声が聞こえたような気がしたけど、

私は無視して家とは逆の方向、つまり広場の方に逃げるように走った。

◇

「レビィ！　レビィ！」

広場の手前、本来はバードウォッチングをするための場所で私の前に、あの妖精が現れた。一体なんなのだ。過去に戻って、私を助けたとか。となると、昔、私を助けた誰かさんは未来の私だったとでもいうのか。頭が痛い……。

「レビィィィィィィィィ!!!」

また妖精が発光した、その強い光に私は目を閉じる。今度は一体なんだ？　いい加減、私を現実に返してくれ。

しばらくして光が収まると、先程まで感じていた森の違和感と一緒に妖精は居なくなっていた。前に目を向ければ、沢山の鳥や小動物とピカチュウが居る。そして――――

「ピカチュウ！」

「うん、美味しいピカチュウ？」

そこには、ピカチュウと腕に載せた津雪　美々の姿があった。

「……っ!?」

なに、これ？　ちょっと待って、なにこれ!?　どういうこと？　なんであそこに私がいるの？　……私？

私は誰？　名前は津雪　美々。女の子。趣味は山の中を駆けること。大好きなのは、みんなと一緒に遊ぶこと。

……違う。

私は、津雪　美々じゃない……。

じゃあ、私は何？

混乱する私は、意識を確かめようと自分の顔を手で叩いた。

その瞬間、私の中のナニカが壊れたような……いや『はがれた』ような気がした。

あぁ……あぁ……。

思い出した。

全部、思い出した。

私は、ずっと、あの子のフリをしていたんだ。

あの時、あの子は川で溺れて死んだんだ。あそこに居た幼い頃の私が溺れているところを、あの子が助けようとして、その代わりに……。

そして死んだ彼女の遺品から残留思念を受けて、ずっと彼女のフリをしてきたんだ。彼女のかわをかぶって、彼女になりきって、自分が人間じゃないことすら忘れていたん

だ

それが、今の私が、溺れる筈だった彼女を助けたから、彼女は生きているんだ。

そして、今の衝撃で、私の『ばけのかわ』が、はがれちゃったんだ。

あ、あはは……なんて滑稽なんだ、自分が誰かすら忘れていた私は、恩人である彼女の姿で道化（ピエロ）を演じていたのか。生き恥を晒して、さらに彼女に迷惑を掛けてしまったんだ。

あぁ、でも、あの子が生きていて良かった。私を助けようして溺れてしまった心優しい彼女が生きていてよかった。

会いたい。もう一度、あの子に会いたい。会ってお礼を言いたい。

「――――ッ」

……でも、それはダメだ。『ばけのかわ』が無くなった私が会ったら、きっと怖がらせちゃう。もしかしたら、恐怖で死んじゃうかもしれない。

私は、この山を去ろう。

今のあの子には、あのピカチュウがいるのだ。私の憧れる人気者のピカチュウがいるのだ。

なら、私はもういらない……。

さようなら、人間さん。もう、会うことは無いと思うけど、元気でね……。

でもやっぱり、一人は、少し、寂しいな……。

おまけ

森の中を私は歩く。ここを去る以上、この森の姿はコレで見納めだ。
ゆっくりと、しっかりと、じっくりと、ここが私の生まれた場所であり、育った場所であり、生きた場所であることを思いながら、少しずつ前に進む。
もう、新しい『ばけのかわ』は被った。あとはこのまま、気の向くままに別の土地へ行こう。なるべく、この山から離れよう。あの子に会わないようにしよう。

◇

どれくらい時間が経っただろうか？
これで最後だと考えて、山の中をグルグル回るように遠回りして出口に向かっていた。
でも、それももう終わり。
ここから外に行けば、もう私を知っている者は居ない。ここを通れば、この思いもきっと切り替えて行ける筈だ。
じゃあ、さよならだ……。
「ブイー！」

……？

「ブイー！　ブイブイブイー！」

「パッチ！　パッ！」

「コン！　ココン！」

「シーキ！」

……。

私の目の前に、４匹の動物がいた。あの、彼女のフリをして広場に置いた木の実を食べていた４匹だ。

「パッチ！」

白い体に水色の模様が付いたリスは、頬にパチパチと電気を走らせる。

「ブイブイブーイ！」

両腕にヒレと首の回りに浮袋が有るイタチは、後ろ足で立ちあがると両腕を組む。

「コーン！」

尻尾が６本に分かれて毛がカールしてる赤いキツネが、ジッとこちらを見ている。

「シキシキ！」

今の四季が夏なので緑色の体毛になっているシカが、道を遮るように立っていた。

「……」

これはなんなのだろうか？　どうして私を通らせないように道を塞いでいるのだろう。

もう、私がこの山に居る理由は無い。私はこれから、山の外で生きていく。どうせ私は一人なのだ、なんの後腐れも無い筈だ。

「ピーカーチュー！」

今度は後ろから声が聞こえた。聞き間違える筈もない、あのピカチュウの声だ。まさかピカチュウまで私の邪魔をするつもりなのだろうか？　そう思った私は、その直後に聞こえて来た声に、目を見開いた。

「待って！　待って、ミミッキュ！」

「!?」

その声を、私は知っている。その顔を、私は知っている。その人間を、私は知っている。

山の奥から、ピカチュウと一緒に息を切らせながら走って来た女の子は、先ほど広場で見た時よりも明らかに泥だらけだった。

「やっと、やっと見つけた」

荒い呼吸をしながら、女の子は私を見て来る。

まさか、ずっと私を探していたとでもいうのか？　こんな、泥だけになるまで――

「良かった。もう一度あえて、本当に良かった」
なんで、なんでなんだ！　やっと、踏ん切りが着いたのに！　やっと、諦めることを受け入れたのに！　なんで！　今になって！　君は、私の前に現れたんだ！
避難の目を、女の子に向ける。だが、そんなことなど気にもしないように、女の子は屈んで私に笑いかける。
「ずっと、お礼を言いたかったんだ。あの時、私を助けてくれて――――――」

ありがとう

「っ！　――ッ！」
私は、うつむいた。目から出て来る水を、見られたくなかったからだ。
違うんだ、助けられたのは私の方なんだ。水遊びをしている君に不用意に近づいて川に落ちた私が悪いんだ。
君を危険に晒したのは私の方なんだ。君にお礼を言われる資格なんて、私には無いんだ！
「ねえ、ミミッキュ？　良かったらなんだけど、私のお願いを聞いてくれないかな？」
「っ！」

　なんだ、どんなお願いだ？　なんでも言ってくれ！　私に君へお礼を――いや、償いをさせてくれ！

「私と、友達になってよ！」

「――――ツツツツツ!!!!!」

　あっ

　あぁ……

　ああ!!!!!!!!!

　そうだ。私は、君を見つけて、友達になりたくて、近づいたんだ。

　一人は、さみしくて！　一匹は、さみしくて！　私も、皆と、仲良く遊びたいのに、私の姿は恐ろしいから！　それでも、友達になりたくて！

　限界だった。目から溢れて来る水を止めることができなかった。そんな私の姿を見た女の子は――

「おいで、ミミッキュ」

　笑顔で私に腕を広げてくれた。

「キュー！」

それに私は、恥も外聞もなく全力で女の子に飛び込んだ。

ある地方のポケモンリーグで、新しい殿堂入りトレーナーが生まれた。
持っていたポケモンは僅か6体であるにもかかわらず、みごとチャンピオンとのバトルで勝利を収めた少女。
殿堂入りした彼女が記念撮影された写真には彼女のポケモンである『パチリス』『フローゼル』『キュウコン』『メブキジカ』『ピカチュウ』そして、彼女の腕に抱きかかえられている『ミミッキュ』の姿が映っていた。

後日談

長い長い旅をした。
森を飛び出し、山を越え、海を越え、空を飛び、村を、町を、街を、いくつも、数え切れないほど旅をした。
見上げても頂上が分からないほど大きな建物で買い物をし、屋上で遊んだ。
迷路のような深い森で迷子になって死にかけた。
水の都と呼ばれる美しい街で水上レースに参加した。
きまぐれでコンテストに参加して、決勝戦まで進んだのに敗北して悔しがった。
ポケスロンに出場して、あのピカチュウと意地を張りながら優勝した。
いろんな出会いがあった、いろんな別れがあった。
だが、それは思い出。所詮は過去に過ぎない。
私たちは今、故郷の山へと戻ってきている。これは彼女の決まった行動だ。一つの地方を回り終えれば一度帰省し、しばらく経ったら他の地方に旅に向かう。
いわば一種の休息のようなものだ。私を含めた彼女のポケモンは、彼女が帰省すると森に放される。普段は彼女と行動を共にしているが、このような時は自由にしていいと

いう彼女なりの気遣いなのだろう。だが――――

「キューー！」

私は叫ぶ。これだったら旅をしていた方が、何十倍もマシであると。

「カンビッ！」

「アクジキッ！」

目の前で争う二つの巨体。いねむりポケモンのカビゴンと、あくじきポケモンのアクジキングである。

世間では、彼女は私を含めた同期の6体しか所持していないと言われているが、それは間違いだ。

確かに彼女は、自分からポケモンをゲットするようなことはしないが、旅をする間に仲良くなったポケモンの方からゲットを望まれることが何度もあったのだ。

もっとも、彼女は公式の試合では頑なに私たち6体を使用する。私たち以外がバトルするのは基本的に野良試合のみだ。もっともそれは、最古参である私たちの方が強いからだ。私たちを置いて大会に出場したいというのなら、バトルで勝利して権利をもぎ取って見せろ。

さて、説明したように彼女は私たち以外のポケモンは基本的に使わない。そして一人のトレーナーが一度に持てるポケモンは6体まで、そうなると残りのポケモンたちはど

こにいるのか？

その答えが、ここである。

「ガブッ！」

「リルリルリル！」

「クチーット！」

「バナバァーナ！」

「ヘアッ！」

「ムクホー！」

トレーナーは目と目があったらポケモンバトルをするらしいが、ここではポケモン同士が出会ったら即バトルだ。もちろん、カビゴンとアクジキングがしている多食い対決のような平和的なモノではなく。ポケモンジムで行われるようなガチの真剣勝負である。

「キュー！」

彼女が帰省する数日間、この山は彼女に付いて行くポケモンを決めるバトルフィールドと化すのだ。ちなみに不意打ち、罠、共闘、何でもありで、一度でも敗北すれば彼女に付いて行く権利は失われる。

きっと今も山のどこかで同期のポケモンたちもバトルを繰り広げているだろう。彼

女のポケモン全てがバトルに参加する訳ではないが、一匹頭３０匹は連続でバトルだ。
さて、覚悟も決まったところで、そろそろ私もバトルを始めるとするか……。
「キュー！」
私はいつものように森の中を走り出した。
この森で、この山で、この私に勝てると思うなよ、未熟者ども！　彼女に付いて行く権利は、誰にも渡さん！

「おーい！　ミミッキュー！」
「キュー！」
７日間に及ぶ壮絶な戦いを終えて、私を呼ぶ彼女の声に、私は草むらから姿を出して返事をした。
「あっ、居た。おいでミミッキュ」
「キュー！」
私はいつものように彼女に向かって飛び付いた。そんな私を、彼女は優しく受け止めてくれる。頭の上や肩は、あのピカチュウの場所であるが、彼女の腕の中は私の指定席だ。
「ふふっ。みんなと仲良くしてくれた？」

「キュー！」
彼女の言葉に私はコクリと頷いた。
今頃はみんな仲良く、ハピナスとタブンネの世話になっていることだろう。
「そっか。じゃあ、ここに残る？」
「キュー！」
私は思いっきり身体を左右に振り回し、彼女の提案を否定する。
「だったらまた、私に付いて来てくれる？」
「キュー！」
当然である。私が彼女に付いて行かないなどありえない。今度こそ、私は彼女を守らなければならないのだから。
どこであっても、私は彼女の為に戦い。
どんな理由があろうとも、私は彼女の味方であり続け。
如何なる危機からも、私は彼女を救い出してみせる。
なぜなら私は――
――彼女のエースポケモンだからな！

その後、合流した同期たちは、私の言葉が気に食わなかったのか。彼女が眠った深夜にバトルをして、地図を書き換えなくてならないほど地形を変えてしまったが、それはまた別のお話だ。